

D-1トレンチ平面図 2-1ピット掘削形状 (No.139) を修正

従前

見直し後

第833回審査会合

資料1

敦賀発電所2号炉敷地の地形、地質・地質構造について (コメント回答)

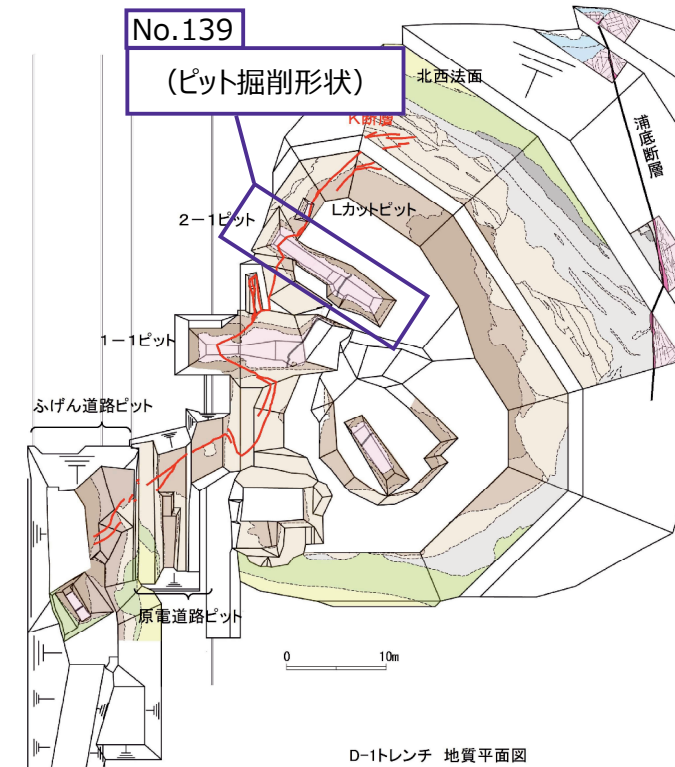
23頁

第833回審査会合 資料1に追記(青太枠)

K断層の連続性評価について

K断層の性状

- K断層の分布図を以下に示す。
- K断層は、D-1トレンチの北西法面からふげん道路ピットの中央付近に至る区間において連続して認められる断層であるが、後述の通り、これより南方へは連続せず、重要施設の直下に連続していないと判断している。



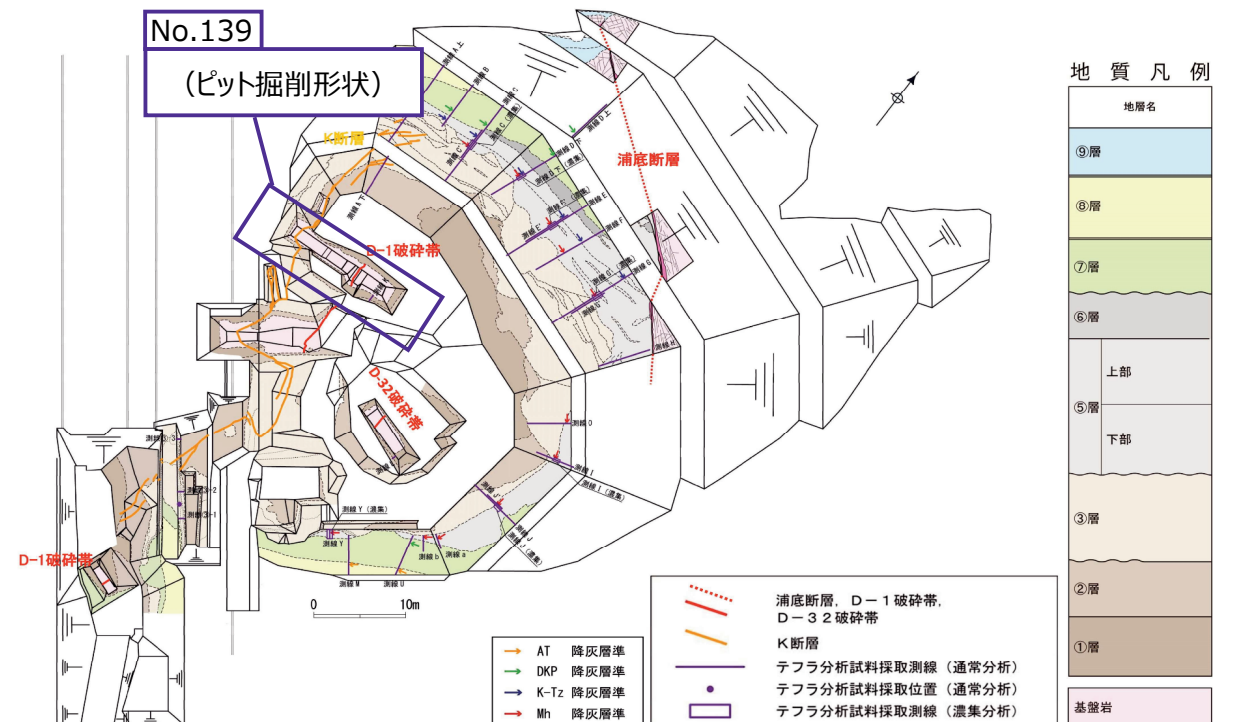
D-1トレンチ 地質平面図

地質層序表

年代	地層名	色調	層相	年代指標	堆積年代
第四紀	⑨層	褐～にぶい黄褐	礫混じり砂質シルトからなる。非層とは平行な不整合面で見られる。	テフラ	MS2以降
	⑧層	褐～黄緑	シルト質砂を基質とする砂礫からなり、一部に成層構造もみられる。下位の⑦層とは平行な不整合面で見られる。	AT降灰層準を含む (R029-27ka)	MS2&MS3の境界付近
	⑦層	褐～黄緑	礫混じり砂質シルト～礫混じりシルト質砂よりなる。山岳部で下位部とは平行な不整合面で見られる。低地では下位部を斜断した不整合面で見られる。	DKP降灰層準を含む (R029-50ka)	MS4-5
後更新世	⑥層	灰～黄灰	成層質砂質シルト～シルト質砂からなり、未片を多く含む。⑤層上部と整合関係で見られる。	-	MS5a-5b
	⑤層	灰白～淡黄緑	シルト質砂礫主体で、シルト層～シルト質砂層が不連続に層状を呈し、成層質シルトを含む。緩い西側傾斜で一定の層厚を示す。	K-T降灰層準を含む (R029ka)	MS5c
中更新世	④層	灰白～淡黄緑	シルト質砂礫主体で、シルト層～シルト質砂層が不連続に層状を呈し、成層質シルトを含む。北法面の東方に向かって層厚が厚くなる。③層とは不整合関係で見られる。	美濃テフラ (127.5ka)の降灰層準を含む	MS5e
	③層	淡黄緑～黄	砂礫主体で、シルト層やシルト質砂層を層状からレンズ状に挟み、セメントによる固り込みが確認される。最上部には土壌化した地層が認められる。	MS5eのテフラを含む	MS5e以前
古第三紀	②層	にぶい赤褐～黄褐	くさり礫を多く含む塊状で硬まった砂質シルトからなり、くさり礫と砂の互層からなり、一部には成層質シルトを含む。	-	MS5e以降
古第三紀	①層	にぶい赤褐～黄褐	よく硬まった塊状の悪い砂礫からなり、くさり礫を多く含む。	-	MS5e以前
古第三紀	基盤岩				

(凡例)  
 - 整合境界  
 - 傾出されていない  
 - 不整合境界  
 - 実証せず

- ⑤層は、堆積構造の違いから上部と下部に細区分される。
- ⑤層下部は北法面の東方に向かって層厚が厚くなっており、⑤層上部は緩い西傾斜で一定の層厚を示す。⑤層は下位の③層とは不整合関係で接する。



第7.4.4.80図 (1) D-1トレンチ テフラ分析結果 (その1)

D-1トレンチ平面図 ボーリング掘削方向及び掘削長 (No.140) を修正

従前

見直し後

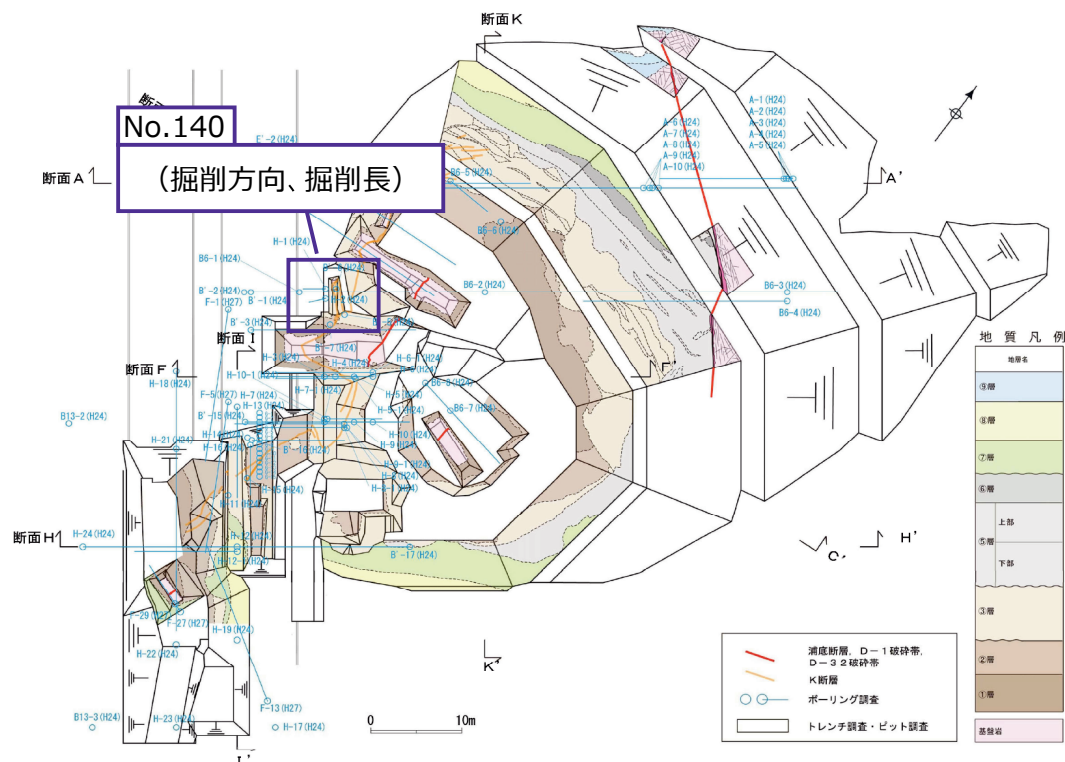
令和3年7月16日提出  
 敦賀発電所2号炉敷地の地形、地質・地質構造について (コメント回答)  
 75頁

令和3年7月16日提出資料に追記(青太枠)

K断層の連続性評価について

D-1トレンチ断面図(断面位置図)

- D-1トレンチにおけるK断層の分布を地質断面図に示した。
- D-1トレンチ内においては、K断層は北西法面からふげん道路ピットの中央付近に至る区間において、連続して認められる(断面K、断面A、断面C、断面F及び断面I)。



別紙6-7-4-14

• D-1トレンチに分布する地層は、花崗斑岩とそれを覆う第四系からなり、第四系は層相に基づき下位より①層～③層及び⑤層～⑨層の地層に区分した。



第7.4.4.69図 D-1トレンチ 層相区分

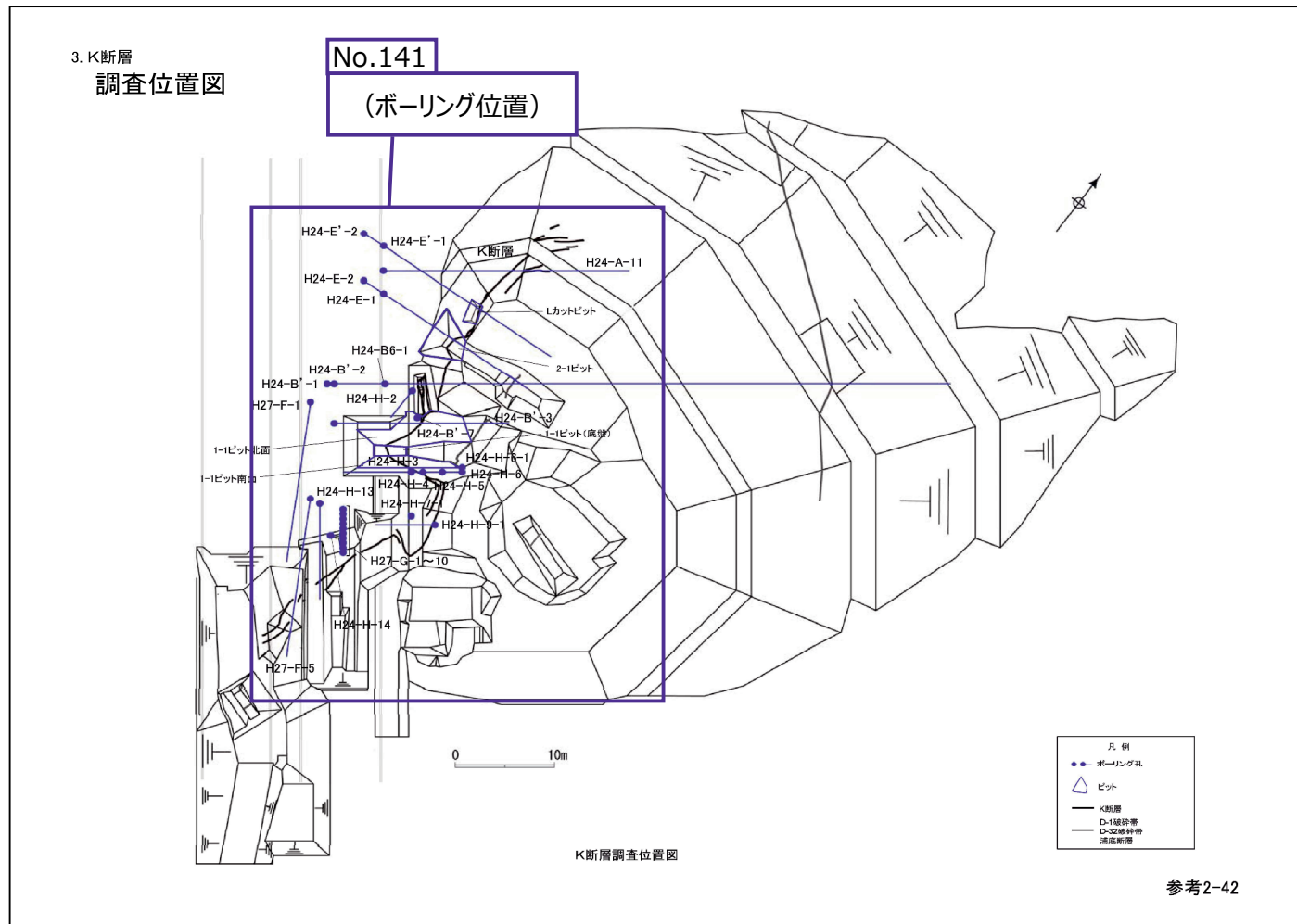
D-1トレンチ平面図 ボーリング位置 (No.141) を修正

従前

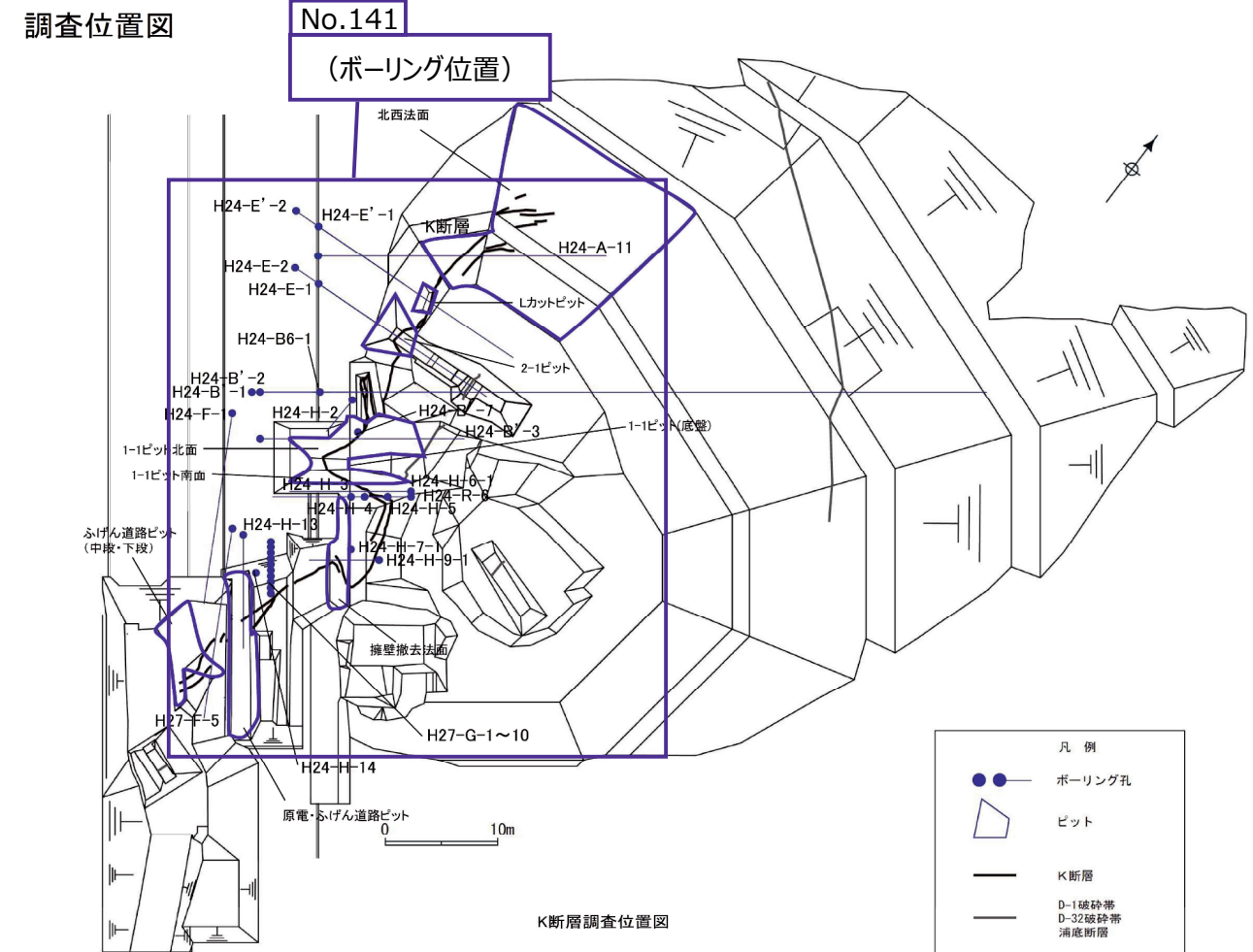
見直し後

第833回審査会合  
机上配布資料2  
敦賀発電所2号炉敷地の地形、地質・地質構造について  
参考資料2 性状一覧表  
参考2-42頁

第833回審査会合 机上配布資料2に追記(青太枠)



参考2-42



※敦賀発電所2号炉敷地の地形、地質・地質構造敷地内のD-1トレンチ内に認められるK断層の活動性、補足説明資料2、性状一覧より記載

D-1トレンチの地質断面図 (C-C'断面) 2-1ピットの形状 (No.142) を修正

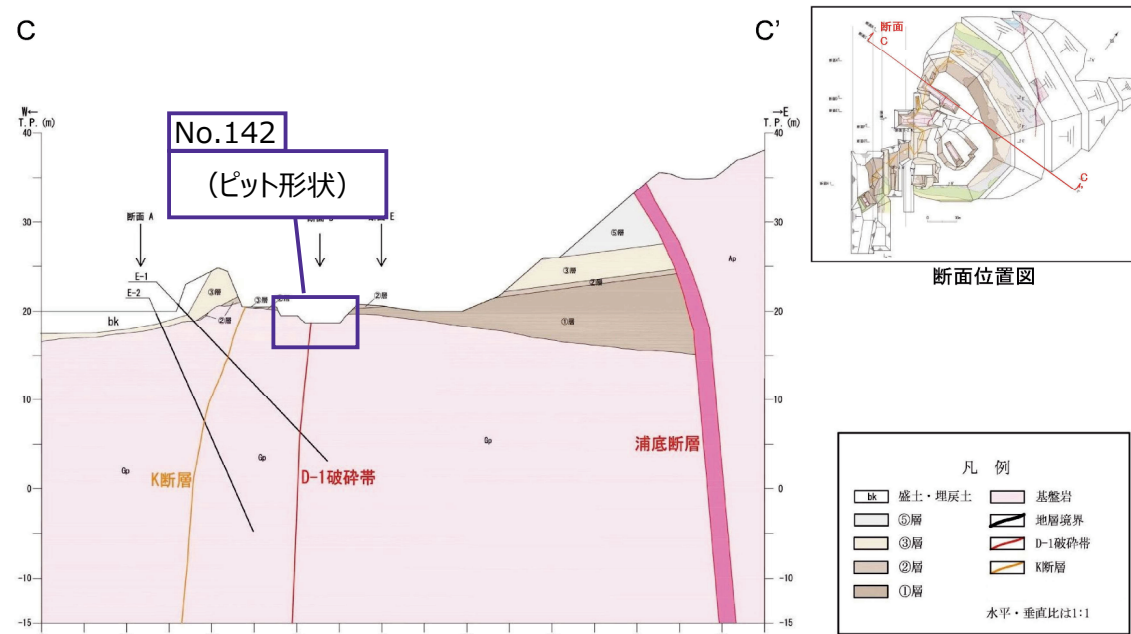
従前

見直し後

第536回審査会合  
机上配布資料1  
敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造について  
参考資料 (2 / 3)  
参考1-240頁

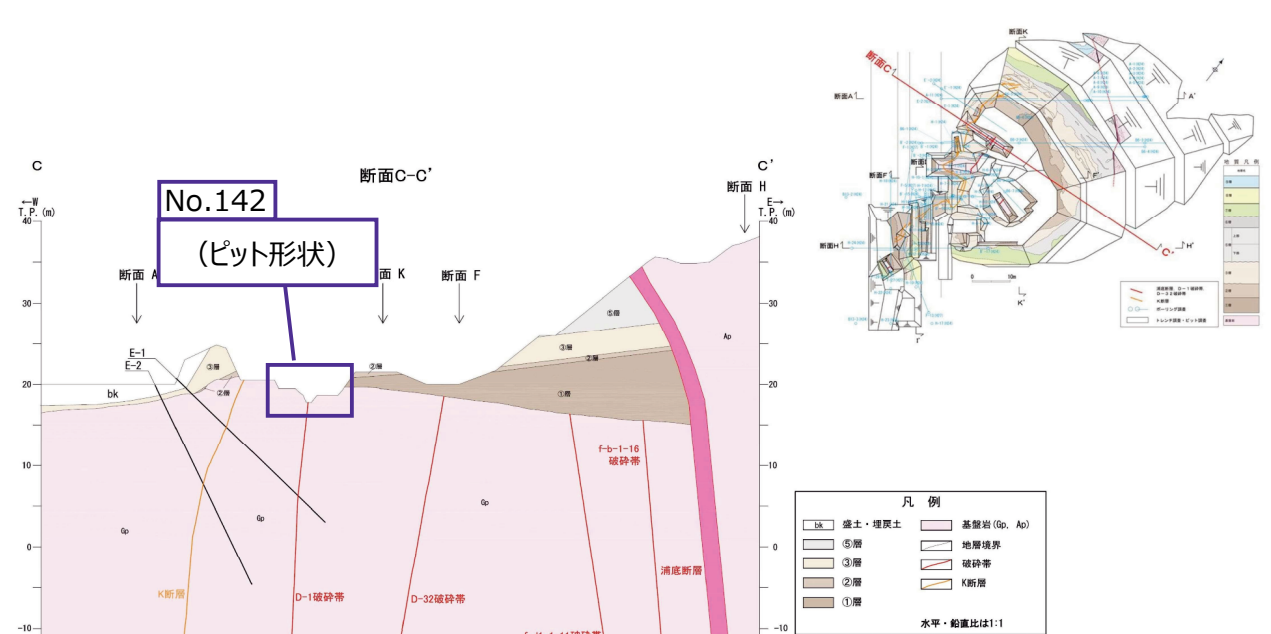
第536回審査会合 机上配布資料1に追記(青太枠)

2.2 (1) D-1破砕帯  
D-1トレンチの地質断面図(C-C')



D-1トレンチに分布する地層は、花崗斑岩とそれを覆う第四系からなり、第四系は層相から下位より①層～⑤層に区分した。

参考1-240



第7.4.4.70図 (3) D-1トレンチの地質断面図 (C-C')

6-7-136

**1. 変更内容、理由及び断層連続性評価への影響**

・H-12孔より南側の地表面をピットの法面の形状に修正 (No.143)

・K断層による地層の変位量の変更 (No.144)

【理由】ふげん道路ピットにおける変位量 (約50cm) を考慮し、断面図の表記 (基盤岩、堆積物の①層、②層及び③層のK断層による変位) を変更。

・H-12孔、H-13孔、H-16孔の長さの修正 (No.145)

【断層連続性評価への影響】 なし

**2. 変更箇所**

a H-12孔より南側の地平面をピットの法面の形状に修正 (No.143)

b K断層による地層の変位量を変更 (No.144)

c H-12孔の黒線の長さを長く修正 (No.145)

d H-16孔の黒線の長さを長く修正 (No.145)

e H-13孔の黒線の長さを短く修正 (No.145)

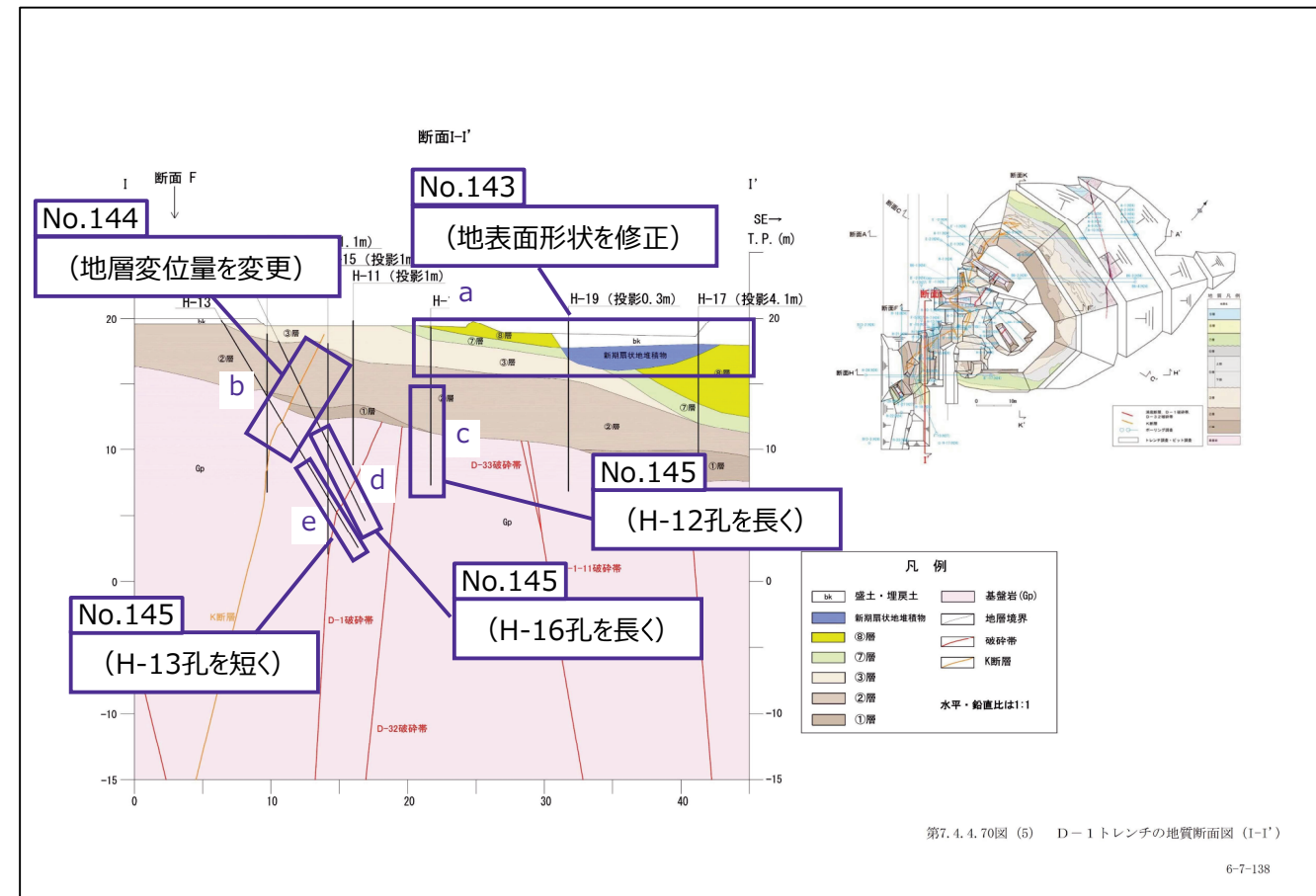
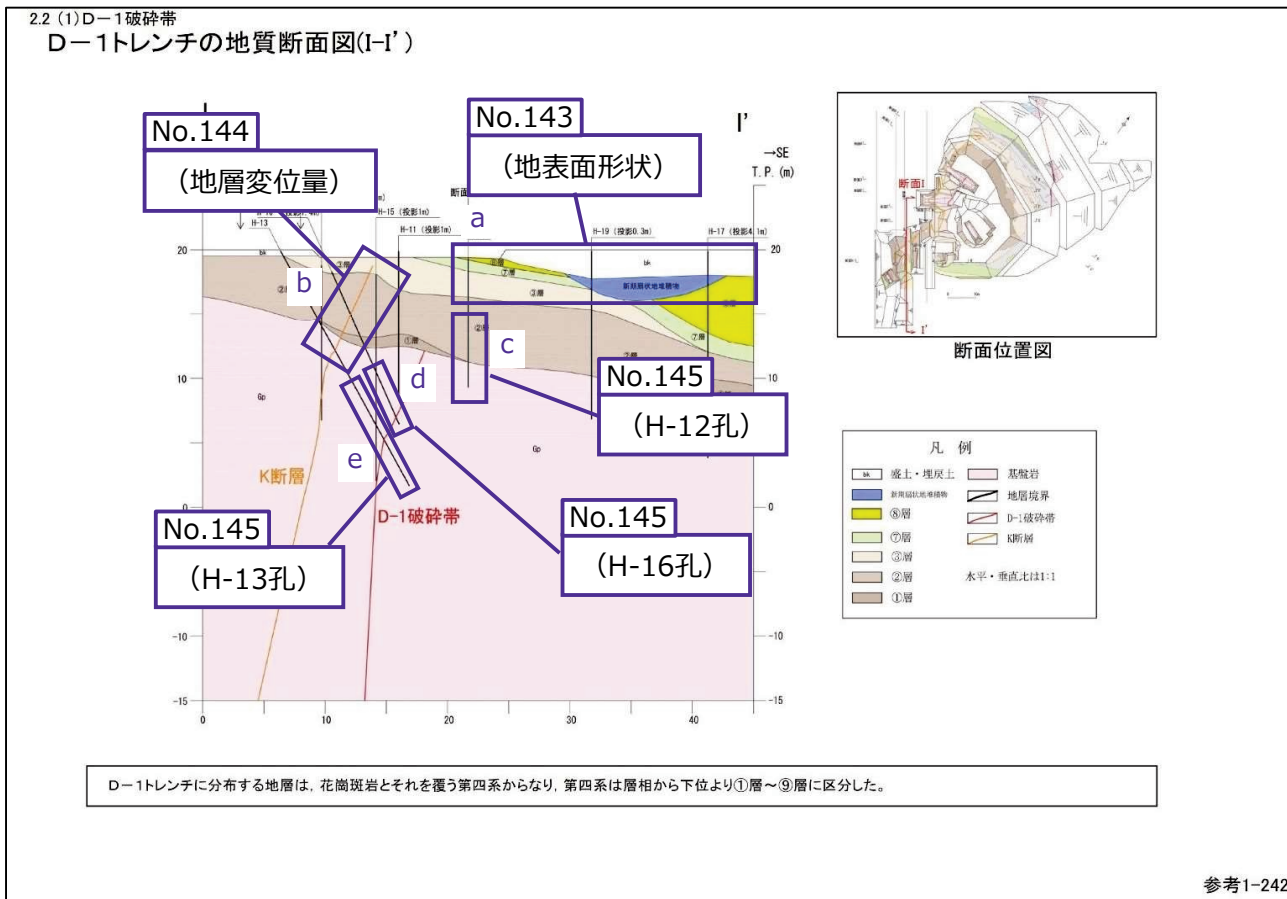
D-1トレンチの地質断面図 (I-I') 最新のトレンチ形状 (No.143) 、ボーリング掘削長 (No.145) を修正、正しい地層変位量 (No.144) に変更

従前

見直し後

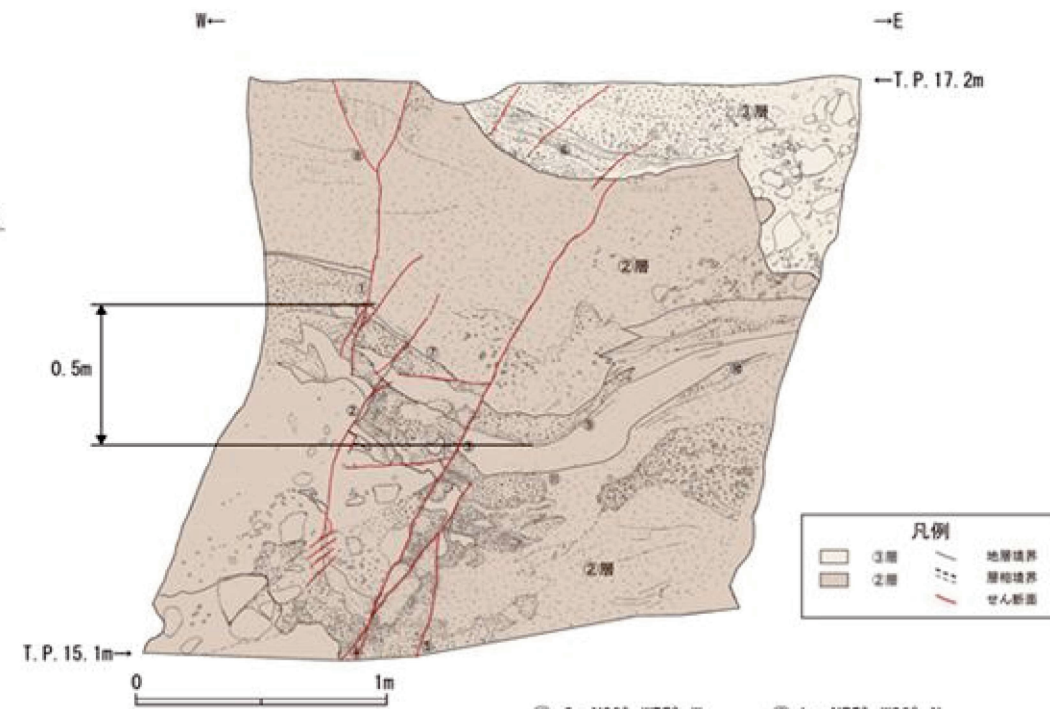
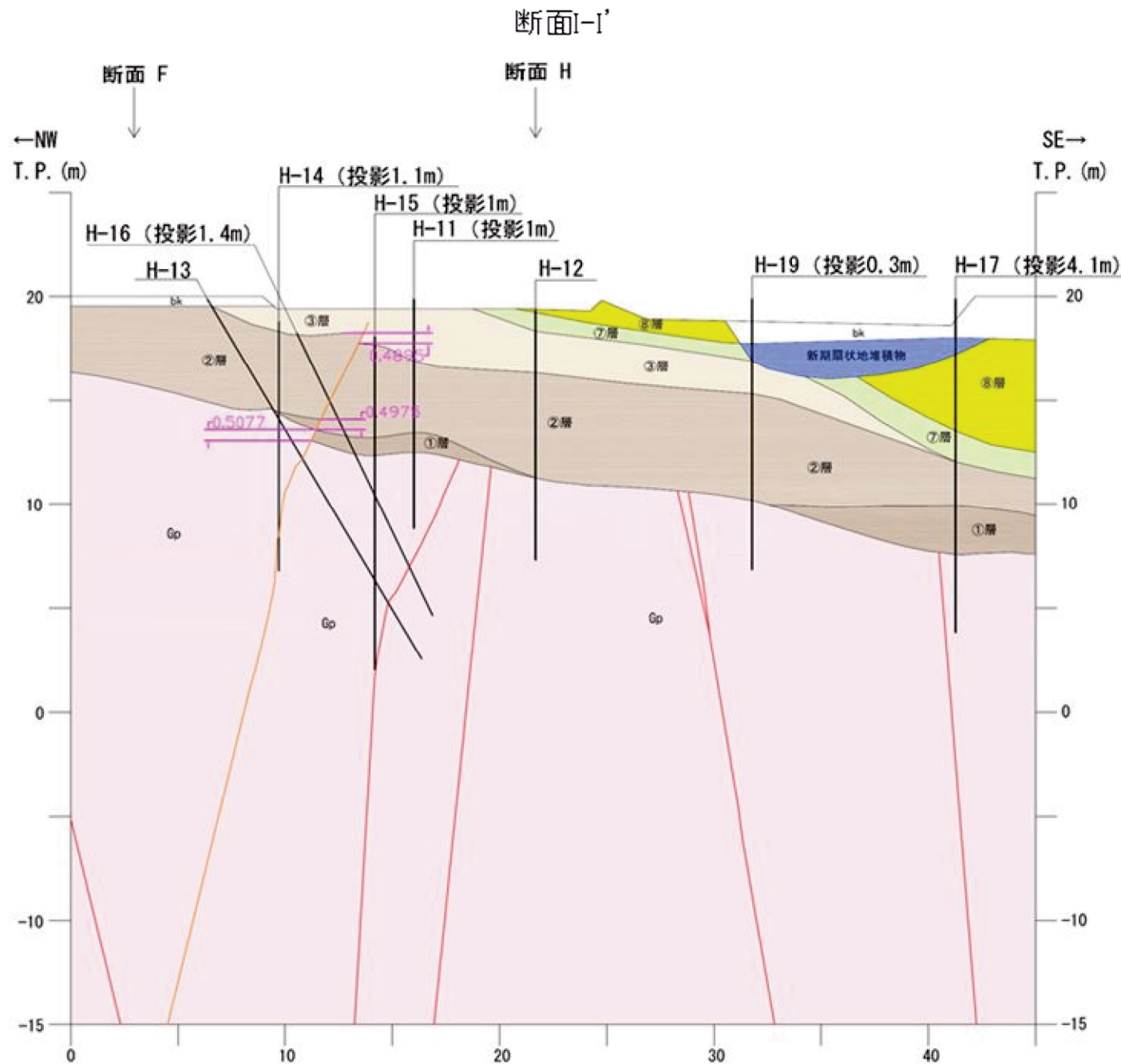
第536回審査会合  
机上配布資料1  
敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造について  
参考資料 (1 / 3)  
参考1-242頁

第536回審査会合 机上配布資料1に追記(青太枠)

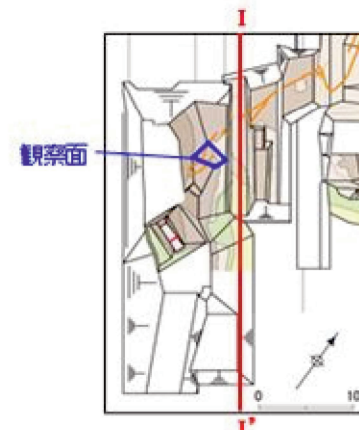


D-1トレンチの地質断面図 (I-I') 正しい地層変位量 (No.144) に変更

• 断面図上の変位量 (約50cm) を確認した。



- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| ① f: N29° W75° W | ⑥ b: N75° W39° N  |
| ② f: N25° E76° W | ⑦ b: N30° W26° E  |
| ③ f: N14° W62° W | ⑧ b: N57° W9° W   |
| ④ f: N35° E75° W | ⑨ b: N77° E2° S   |
| ⑤ f: N1° W70° W  | ⑩ b: N47° W21° SE |
| f: せん断面          | ⑪ b: N5° W10° W   |
| b: 層理面           |                   |



- ③層: 砂礫 にぶい黄橙色～黄灰色 (10YR7/4～2.5Y6/1)  
 礫は径20cm以下の角～亜角礫主体である。礫率30～50%  
 基質は中粒砂～粗粒砂であり、淘汰極めて悪い。  
 礫混じり砂 黄灰色～黄褐色を呈する。砂は細粒砂～粗粒砂であり、  
 径5～50mmの礫が混じる。ラミナが発達する。砂礫層中に挟在して分布する。
- ②層: 礫・シルト混じり砂 灰白色～灰黄色 (2.5Y7/1～2.5Y7/2)  
 細粒砂～粗粒砂からなり、径40cmの花崗岩礫が混じる。くさり礫が混じる。  
 砂質シルト 灰白色 (2.5Y7/1)  
 シルトを主体とし、細粒砂が混じる。よく締まっている。

D-1トレンチ北西法面スケッチ 新版スケッチへの最新化 (No.146) 及び地層の色調 (No.147) を修正

従前

見直し後

第833回審査会合

資料1

敦賀発電所2号炉敷地の地形、地質・地質構造について (コメント回答)

25頁

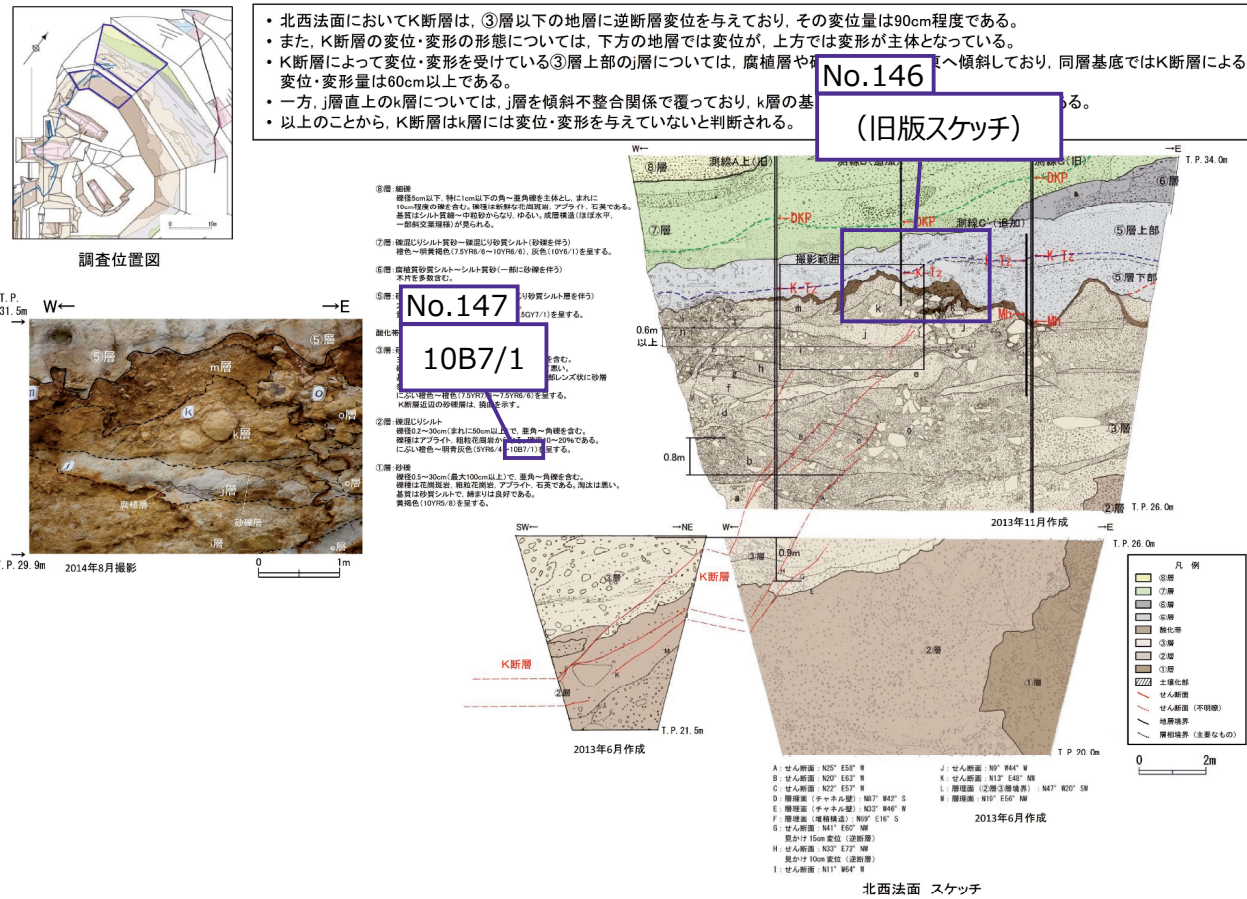
第833回審査会合 資料1に追記(青太枠)

K断層の連続性評価について

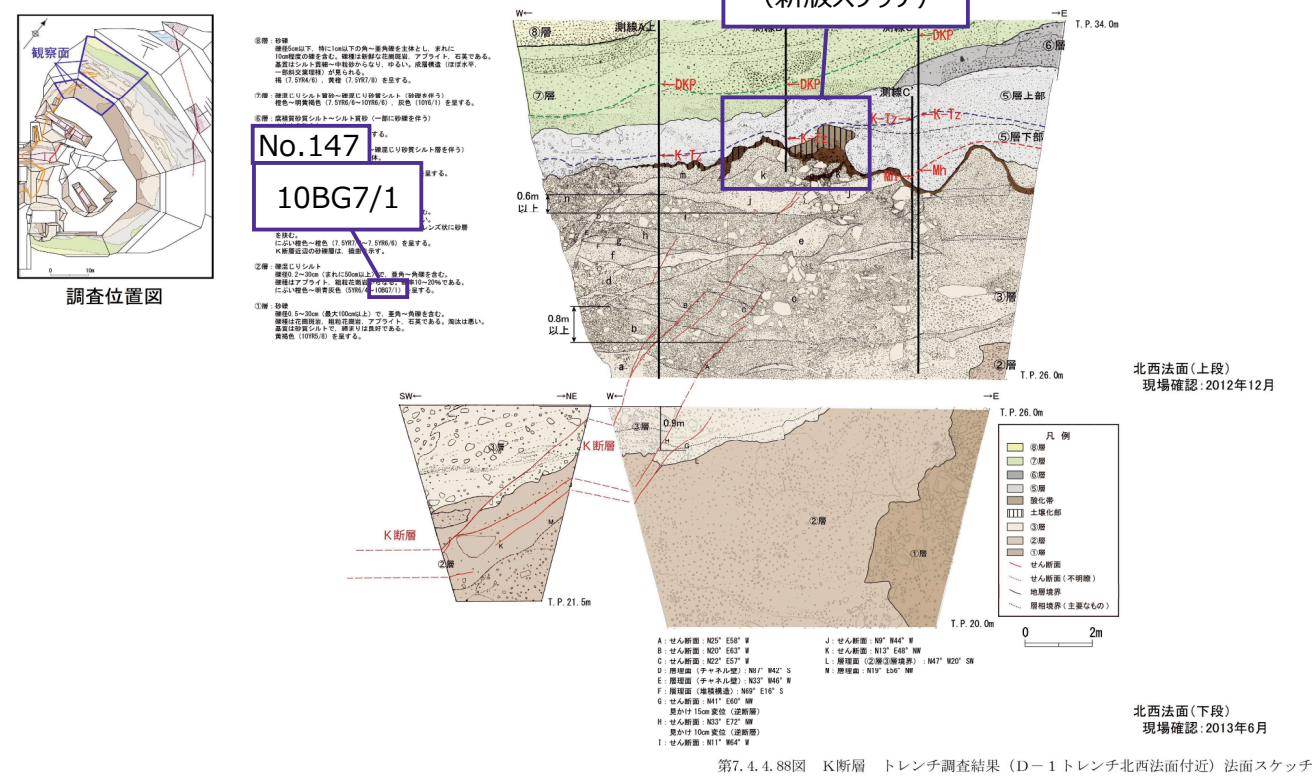
K断層の性状(北西法面)

第536回審査会合 資料2 修正

- 北西法面においてK断層は、③層以下の地層に逆断層変位を与えており、その変位量は90cm程度である。
- また、K断層の変位・変形の形態については、下方の地層では変位が、上方では変形が主体となっている。
- K断層によって変位・変形を受けている③層上部の層については、腐植層や砂層へ傾斜しており、同層基底ではK断層による変位・変形量は60cm以上である。
- 一方、j層直上のk層については、j層を傾斜不整合関係で覆っており、k層の基底では変位・変形を与えていないと判断される。



- K断層は、D-1トレンチ北西法面の付近の②層と③層の境界に逆断層変位を与え、北西法面へ鉛直変位量は0.9mであり、D-1トレンチ北西法面の上方に向かって変形が主体となっている。
- 断層の変位・変形量を鉛直面に投影した量を「鉛直変位量」と呼称する。





K断層南方f-f'断面図 破砕部と破砕帯の位置関係 (No.148) を修正

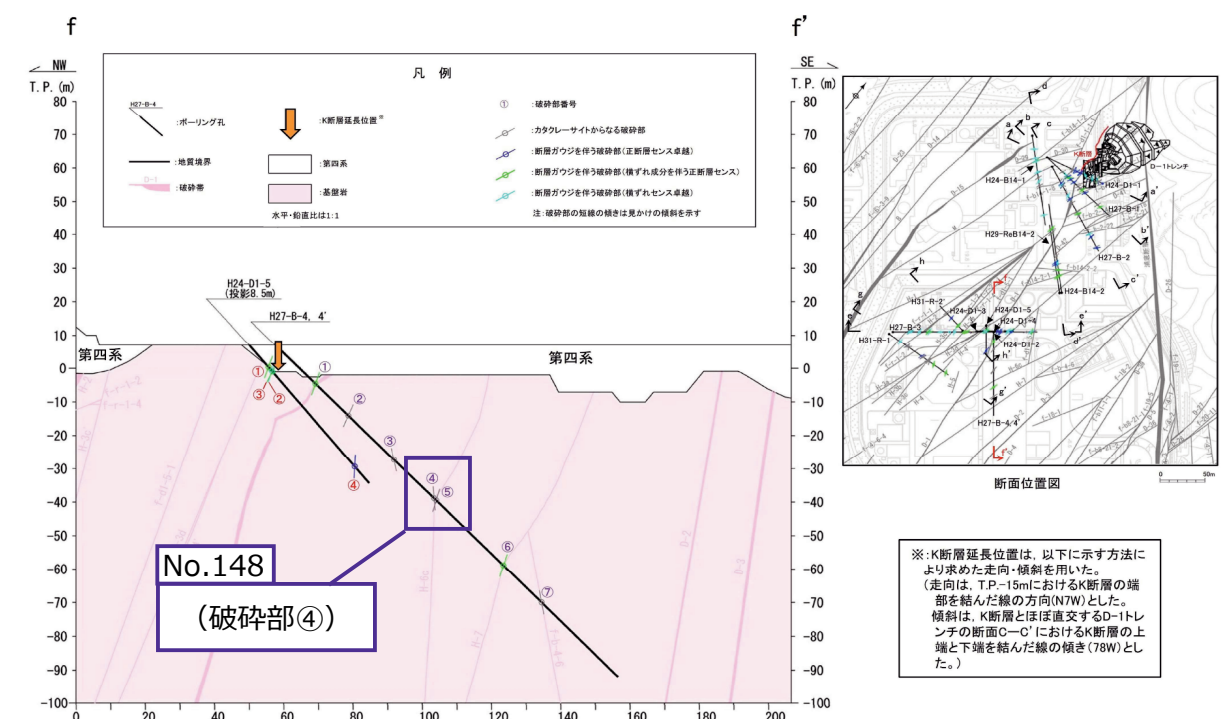
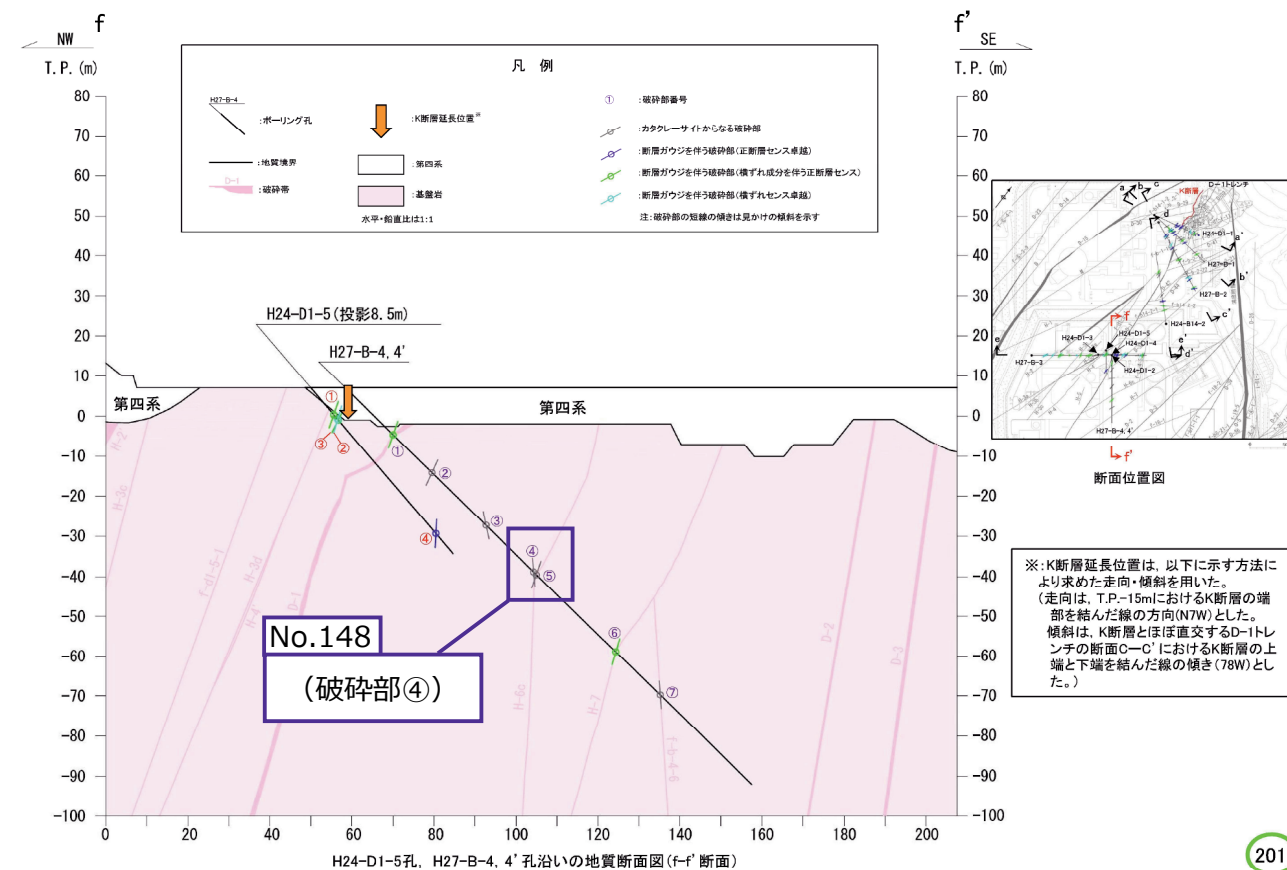
従前

見直し後

令和3年7月16日提出  
 敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造について (コメント回答)  
 201頁

令和3年7月16日提出資料に追記(青太枠)

K断層の連続性評価について



第7.4.4.119図(20) K断層とH24-D1-1孔から重要施設までの間で実施したボーリング孔の全ての破砕部との連続性の確認 (f-f'断面) 6-7-269